

「興味ない」と淫魔の
私を拾った冷徹英雄様、
嫉妬していた恋敵が実の
弟だと知った瞬間に箍が
外れて、精気潰けの中
出しを連発してくるお話

なぎさ

なぎさの妄想部屋

文庫版 / 体験版

精気ください

夕暮れが近づくと、いつも身体のほうが先に怯えはじめる。

鍵のかかった部屋で膝を抱えて、私は廊下の足音を待っていた。怖い。怖いのに——お腹の奥は、もうとつくに熱くて、疼いて、彼を欲しがっている。

廊下の奥で、扉が鳴った。

心臓が、跳ねる。

「ロゼッタ。待たせたな」

低い声。以前は氷みたいに冷たかったその瞳が、私を見た途端、とろりと潤んで熱を持つ。獲物をやっと思つけた、獣の目。

——あの雨の夜。道端で私を拾ったときの彼は、こんな目をする

人じゃ、なかったのに。

ぐちゅっ♡ずぷっずぷっ♡ぐちゅっぐちゅっぐちゅっ♡♡♡♡

ぬかるんだ秘裂が、柔らかく肉棒を呑み込み、とぷとぷと白濁の泡を浮かばせた。ぬめった感触が内腿をゆっくりと伝い落ちていく。すでに酔いそうなほど精気で満たされているのに、クロウの硬い熱はまだ少しも萎える気配がない。

「ふああ……♡ クロウっ！ も、もう……っ♡」

「もう、なんだ？」

暗く光る目に見下ろされて、喉がひきつった。やめて、とは言えない。このところのクロウは、私が少しでも拒絶の仕草を見せると、途端に目つきが変わってしまうのだ。そして終わりのない

お仕置きが始まり、結局は溢れるほどの精気をさらに注がれて、何も考えられなくなる。

「ううつ……」

口ごもると、咎めるように腰の動きが強まった。

ごりゅっ！♡ごちゅっごちゅっ♡♡♡

子宮口を重い亀頭で押し潰され、奥からぐぽっと白濁が搾り出される音が響く。その刺激に、だらしなく開いた口から甘い声が漏れた。

「ふあ、ああ……っ♡ もつと……っ！ もつと、くださ

い……♡」

自分からねだる。それだけが、私に許された言葉だった。クロウの唇が、うつそりと綻ぶ。

「ふふ。それでいい、かわいいロゼッタ」

事後、ぐったりと力の抜けた私を、クロウは恍惚と見下ろして、それから壊れ物みたいに抱きしめた。逃がさないための、檻みたいな腕で。

「ロゼッタ……もう、どこにも行かせないからな」

その囁きが優しければ優しいほど、背筋が冷たくなる。

この腕からはもう、出られない。わかつている。

どうして、こんなことになったんだろう。

あんなに遠くて、あんなに冷たかったはずの彼と、私は――。

はじまりは、雨の夜だった。



ルカ、ルカ。

声に出して呼ぶ氣力もう残っていなくて、私はその名前を胸の中だけで繰り返していた。

弟が消えて、もう何日が経ったのだろう。指折り数える余裕すらない。買い物に行くと言って出ていったきり、ルカは帰ってこなかった。私たちには決まった家もなければ、頼れる親戚もない。だから探すのは、私一人の仕事だった。

街の人に聞いて回った。酒場でも、市場でも、辻でも。何人かは「そういえば見たかもしれない」と言ってくれたけれど、どの証言も、ある地点でぷつりと途切れる。まるで、そこから先は世

界が口をつぐんでいるみたいにな。

私とルカは、淫魔だ。

こんなことを口にすれば、たいていの人は顔色を変える。異性をたぶらかし、精気を吸い、ときに相手を干からびさせて死なせてしまう——そういう生き物として、淫魔は忌み嫌われている。

確かに大昔には、好き勝手に人間を食い荒らした同族もいたらしい。けれど戦う力なんて持たない私たちが、人間を敵に回してどうなるかは、火を見るより明らかだった。迫害され、狩られ、追われて、淫魔は今や希少種と呼ばれるほどに数を減らしている。

だから私たちは、淫魔であることを隠して生きてきた。両親を早くに亡くして、姉弟二人きりで。

そして最近、私はもう一つの問題に直面しつつあった。

成人するまでの淫魔は、人間と同じように食事から栄養を摂れる。けれど成人すると、お腹に淫紋という証が浮かび、そこから先は人間の体液から精気を摂らなければ生きていけなくなる。精気は唾液や精液から、口や粘膜を通して直接もらうしかない。容器に溜めておくことも、同族から分けてもらうこともできない。

私はつい先日、その成人を迎えたばかりだった。

淫紋がいつ浮かぶのか、どうやって精気を摂ればいいのか、教えてくれる親はもういない。本で調べようにも。ルカと二人、手探りで、不安だけを抱えて。

（姉ちゃん、男に色目の一つも使えないくせに）

行方が分からなくなる前、ルカはよくそう言っただけで私をからかった。処女のくせに、と。うるさいな、あんたに言われなくてもな

んとかするってば、と言い返したあの日の私は、まさかこんなことになるなんて思ってもいなかった。

ルカ。あなたがいたから、ここまで頑張れたのに。

たった一人の弟。私の、たった一人の家族。

街をいくら探してもいなくて、私は一縷の望みをかけて森に踏み込んでいた。

木立の奥、ぬかるんだ道を、ルカの名前を呼びながら進む。雨が降りはじめていた。冷たい雫が頬を叩き、外套が重く濡れている。

その時——喉が、焼けるように渴いた。

あれ、と思った。水が飲みたいというのは違う。もつと奥のほうから、身体そのものが何かを欲しがっている。頭がくらくら

して、呼吸が浅くなる。

まさか。

物陰に身を寄せて、震える手で服の裾をめくった。

お腹に、うつすらと、淡い紫の紋様が浮かんでいた。淫紋、だ。
来てしまった。よりにもよって、こんなときに。精気が必要になつたという、最初の合図。

頭ではわかつていたのに、心はまるで追いつかなかつた。早く精気を摂らなきゃいけない。でも、どうやって。誰から。こんな森の中で、私は――。

足が、もつれた。

視界が白く滲む。手足の感覚が遠のいていく。膝が折れて、泥の中に崩れ落ちた。指先が地面を搔く。

だめ。まだ倒れるわけにはいかない。ルカを見つけていない。
まだ何も――。

意識が、途切れた。

「おい」

低い声が、闇の向こうから降ってきた。

「おい。死ぬ気か」

身体が持ち上げられる感覚があった。硬い腕。雨に濡れているはずなのに、不思議と、温かい。

「……せい、き……」

掠れた声が漏れた。それが自分の声だと気づくのに、時間がかかった。

「精気……ください……」

理性より先に、淫魔の本能が動いていた。見ず知らずの相手にすがりつくなんて、いつもの私なら絶対にしない。でも身体はもう限界で、生き延びたいという衝動が、私の矜持をあっさり押しつけてしまった。

返事はなかった。

舌打ちが聞こえた——ような気がした。

そして、唇に硬い感触が押し当てられた。

口づけだった。

唇が触れた瞬間、精気が滝のように流れ込んできた。枯れ果てた身体の隅々まで沁み渡って、冷えきった指先に熱が戻っていく。

ただ唇を重ねているだけなのに、何なの、この濃さは。

こんな密度の精気を持つ人間がいるなんて。干上がった砂漠に

水が流れ込むみたいに、身体が際限なく彼を求めてしまう。

どれくらい、そうしていただろう。

唇が離れたとき、意識ははつきりと戻っていた。

雨の中、視界に映ったのは——ひどく、整った顔だった。

切れ長の瞳が、冷ややかにこちらを見下ろしている。濡れた黒髪が額に張りついて、無表情の中に、苛立ちだけがかすかに滲んでいた。鍛え抜かれた身体に纏った外套。その肩に刻まれた紋章を見て、息が詰まった。

この国で、その紋章を知らない者はいない。

少し前まで、この国は長く悪竜との戦いに苦しめられていた。

終わりの見えないその戦いで、鬼神のような強さを見せた男がいる。前線に置かれてすぐに頭角を現し、ついにはかの竜を討ち

取ったという。その戦功で地位と領地を与えられ、今ではこの一帯を治めている。

英雄、クロウ。

まさか、その人に助けられるなんて。

「クロウ……？」

「……道端に転がっている女に、名を知られているとはな」

抑揚のない声。感情の気配がまるでない。

でも、と思った。これはもしかしたら、天が与えてくれた最後の機会かもしれない。

私は泥だらけの手で、彼の外套の裾を掴んだ。

「お願いがあるの。聞いてくれない？」

「……立てるのか」

「たぶん」

身体を起こそうとして、やっぱり足がふらついた。クロウは私の腕を掴んで引き上げ、それから視線を落とした。外套を掴む、泥だらけの私の指へ。

「……話くらいは、聞いてやる」

私は事情を話した。

大切な人が消息を絶ったこと。手がかりが少なく、自分一人の力では助けられないかもしれないこと。

「ルカっていうの。……私には、彼しかないから」

小さい頃からの癖で、つい名前で呼んでしまう。弟、と言えばよかったのだと気づくのは、ずっとあとになってからだ。

クロウは腕を組んだまま、木に背を預けて黙って聞いていた。相槌も打たず、目も合わせない。ただ、聞いている。

「どうか、力を貸してほしいの」

「俺に何のメリットがある」

遮るように放たれた声は、冷たいというより、乾いていた。

わかっていた答えだ。それでも面と向かって言われると、胸の底がずしりと重くなる。

唇を舐めた。覚悟を決めるために。淫魔の私にできることなんて、一つしかない。

「あなたが望むなら、私の、身体を……」

「興味ない」

即答だった。一拍の間もなく。侮蔑も憐れみもなく、ただ事実

をそう告げただけ。

「……そうよね」

俯いた。ルカ、ごめん。

「……この後、どうする気だ」

不意に問いかけられて、顔を上げた。クロウが、こちらを見下ろしていた。

「わからない……手がかりもなくて。もう少し、この辺りを探すつもりだけど」

「住むところは」

「ない……」

正直に答えると、クロウは小さく息を吐いた。ルカを探して彷徨ううちに、宿を取る金も底をついていた。今夜眠る場所すら、

私にはなかったのだ。

「……俺の屋敷に、部屋が余っている。一室だけ貸してやる。人探しの手伝いはしないからな」

「え……」

「聞こえなかったのか」

「い、いえ。でも、こんな素性の知れない女を住まわせて、いいの？」

「淫魔の女が一人。どう頑張ったところで、俺には何もできない」
その言葉の奥に、不思議な信頼のようなものを感じた。淫魔だからどうした、と突き放す態度は、偏見とはちようど正反対だ。

「……ありがとう。お言葉に甘えるわ」

「死なれると、後味が悪いだけだ」

こうして、奇妙な居候生活が始まった。



朝、食堂には二人分の朝食が用意されている。席にはクロウが先に座っていた。

「……おはよう」

「ああ」

それだけ。使用人が音もなく食事を並べて、音もなく消えていく。

無愛想な彼との食卓は、沈黙ばかりだ。それなのに、不思議と居心地は悪くなかった。クロウは多くを語らない人だけれど、こ

ちらが話すと黙って聞いてくれる。相槌を打つでもなく、目を合
わせるでもなく、聞いている。

「今日はルカのこと、南の街で聞き込みしてみようと思うの」

「……」

「何か手がかりが見つければいいんだけど」

「あてもなく歩いたところで、無駄だ」

「それでも行くわ。だってルカは、私がいなかったら……」

声が震えかけて、慌てて飲み込んだ。彼の前で、弱いところを
見せたくなかった。

「……好きにしろ」

その日、玄関で靴を履いていると、使用人がさりげなく一枚の
地図を差し出してきた。

「クロウ様よりお預かりしております。赤い印の地域は、近頃治安が悪いとのことで、お避けくださいませ」

受け取った地図には、几帳面な手で、いくつもの印がつけられていた。危ない場所。避けるべき道。そして、まだ探していない街の名前まで。

手伝いはしない、と言ったくせに。

地図を胸に抱きしめて、私は少しだけ笑った。

その日も、収穫はなかった。

南の街の市場は、夕方になると人でごった返す。聞き込みに疲れて軒先で一息ついていると、近くの男たちの話し声が、ふと耳に飛び込んできた。

「いやあ、ほんと助かったよなあ。あの竜のおかげで、商売あがったりだったんだ。英雄様様だな」

「英雄、ねえ。……お前、知ってるか。あのクロウってのは、人間じゃないらしいぜ」

「人間じゃない？」

「なんでも、呪われた血を引いてるって話だ。よりにもよって、自分が討った竜と同じ血をな」

低くなった声に、私はぴくりと顔を上げた。

「竜の血、つてことかよ。じゃあ、いつ化け物に戻るかわかったもんじゃねえな」

「だろ。助けてもらった口でこう言うのもなんだが……ああいう得体の知れねえのが、この一帯を仕切ってると思うとな。屋敷

だって、わざわざ森の外れに構えてやがる。何か隠してるに決まってる」

どっと笑いが起きる。

気づいたときには、私は立ち上がったていた。

目立つことだけは避けて生きてきた。淫魔だと知られたら終わりだから、いつだって俯いて、息を潜めて。それなのに、足が勝手に男たちのほうへ向いていた。

「……それ、本気で言ってるの」

自分の声とは思えないくらい、低く出た。男たちが怪訝な顔でこちらを見る。

「あなたたち、その人に助けられたんでしょ。竜と戦って、討ち取ってくれたから、今こうして笑っていられるんでしょう。そ

れなのに、血がどうか、隠してるとか……よく言えるわね」

「な、なんだよ、急に。お前、あの男の知り合いか？」

一人がじろりと私を睨んで、にやりと口の端を上げた。

「ははあ。さては、あの化け物に囲われてる女か？ 道理で肩を持つわけだ。お前も仲間じゃ——」

ぐい、と腕を掴まれた。

しまった。出しゃばりすぎた。ここでこの人たちに正体を疑われて、淫紋を見られたら。冷や汗が背を伝う。それでも、さつき言った言葉を取り消す氣にだけは、どうしてもなれなかった。

その時だった。

ざわめきが、波が引くように静まった。

人垣が割れて、男たちの視線が私の背後へ吸い寄せられていく。

掴まれた腕が、びくりと震えて離れた。

振り返らなくても、わかった。背中に感じる、あの気配。

「……帰るぞ」

それだけだった。

クロウは私の手首を、痛くない強さで掴んだ。男たちには一瞥もくれない。なのに、誰も口を開けない。さっきまで好き勝手に囁っていた連中が、蛇に睨まれた蛙みたいに固まっていた。

クロウはそのまま、私を連れて歩きだした。

しばらく、二人とも黙ったまま夕暮れの道を行った。

掴まれた手首は、いつの間にか離されている。それでもクロウは、私のすぐ隣を歩いていた。歩幅を、私に合わせて。

「……ごめんなさい」

耐えきれなくて、私から口を開いた。

「目立つようなこと、しちやつて。あなたにも、迷惑を……」

「なぜ、ああいうことをした」

遮るように問われて、言葉に詰まった。

どうして、と言われても。理由なんて、うまく言えない。ただ、あの人たちが、私の知っているクロウとは似ても似つかない誰かのことを話していて、それが我慢ならなかった。地図に几帳面な印をつけてくれる人。死なれると後味が悪い、なんて言いながら、ぶつきらぼうに精気を分けてくれた人。その人を、顔も知らない誰かが化け物呼ばわりするのが。

「……だって、違うもの」

俯いたまま、私は言った。

「あなたは、あの人たちが言うような人じゃない。それくらい、一緒に住んでればわかるわ」

クロウは、足を止めなかった。横顔は、夕日のせいで赤く陰っていて、表情はうまく読めない。

「……竜の血だというのは、本当だ」

ぽつりと、低い声が落ちてきた。

「人外の混血でな。ガキの頃から、行く先々で気味悪がられた。竜を討ったところで、結局それは変わらん。あいつらの言うことのほうが、お前の見ているものより、よほど正しい」

「正しくない」

気づけば、即答していた。クロウが、わずかに目を見開く。

「血が何だっていうの。あなたが私を助けたのは事実でしょう。」

地図をくれたのも、ご飯を分けてくれてるのも、全部本当のことよ。血の話なんかより、そっちのほうがずっと正しいわ」

言ってから、頬が熱くなった。淫魔のくせに、人間に向かって偏見がどうのと説教するなんて、滑稽だ。私だって、隠している。同じだ。

クロウは、長いこと黙っていた。

それから、ふい、と前を向いて歩きだす。

「……変わったやつだな、お前は」

低く、けれどさっきまでとは少し違う声だった。怒っているわけでも、呆れているわけでもない。何かを持て余しているような。帰り道、私の隣を歩くクロウの歩幅は、いつもよりほんの少しだけ、ゆっくりだった気がした。



その日から、搜索のかたわら、私はある「研究所」の噂を集めるようになっていた。

きっかけは、別の街の酒場で耳にした、酔った傭兵の与太話だ。「森の奥に、でかい研究所があるんだとよ。人ならざるモノを集めて、妙な実験をしてるって話だ。なんでも、不老不死だかの研究らしいぜ。最近も、新しい『素材』が運び込まれたとか……」

被験体。素材。

そんな言葉で人が語られる場所が、この近くにある。ルカが消えた地域と、傭兵の言う方角が、重なる気がした。確証はない。

それでもその話は、頭の隅に貼りついて離れなくなった。

ただ、その糸を手繰るより先に、私の身体のほうが限界を迎えつつあった。

最初の夜にクロウからもらった精気は、思ったより長く保った。でも、毎日歩き回るうちに、じわじわと不足が忍び寄ってくる。お腹の奥が時々疼いて、頭がぼんやりする。淫紋がまた、疼いている。

でも、「もう一度ください」とは言えなかった。

あれは緊急事態だったから分けてくれただけ。部屋まで貸してもらって、精気までねだるなんて、図々しすぎる。

別の手段を考えなきゃ、と思いながら、その日の搜索帰り、屋

敷の裏庭をふらつく足で歩いていた。

「何をしている」

背後から声がして、びっくりと肩が跳ねた。

振り返ると、帰宅したばかりのクロウが立っていた。腰には使い込まれた長剣。夕暮れの逆光で表情は読めないけれど、こちらをじっと見下ろしている気配が伝わる。

「あ、ごめんなさい。なんでもないの」

歩き出そうとして、足がもつれた。

倒れる前に、腕を掴まれた。

「また精気か」

「……うん」

「なぜ、もっと早く言わない」

声に、かすかな苛立ち。

「だって……あなたにばかり、頼るわけには」

「じゃあ、どうする気だ」

言葉に詰まった。ほんの一瞬、視線が泳いだだけだったと思う。でもクロウは、それを見逃さなかった。

「他を、探すつもりか」

「えっ……」

「俺から補給しておいて、他の男ともなんて。器用なやつだな」

声の温度が、はつきりと下がった。掴まれた腕に力がこもる。

痛いほどではないけれど、逃がさない、という意志が伝わってくる。

「不愉快だ」

「ごめんなさい……！　そんなつもりじゃ——もうしないから……」

「……違う」

「な、なにが？」

クロウは一瞬だけ、目を逸らした。それはこの男にしては、ひどく珍しい仕草で。

「……とにかく、この家にいる間は、他の男から摂取するな」
「でも——」

「同じ口で別の男から補給されると思うと、気分が悪い」
心臓が、奇妙な音を立てた。

「ほら。早くしろ」

促されて、つま先立ちになる。あの雨の夜以来の、口づけ。指

先が震えているのを悟られたくなくて、私はぎゅっと拳を握った。

唇が、重なる。

精気が流れ込んでくる。相変わらず濃密で、甘くて、身体の奥がとろりと溶けていく。

「んあ……っ♡」

お腹の奥が、きゅっと疼いた。淫魔にとって、濃い精気には催淫効果がある。身体が勝手に反応してしまう。生理現象だとわかっていても、彼の前でこんなふうになるのは、恥ずかしくてたまらない。

唇が離れる。間近で、切れ長の瞳が私を見ていた。

「……どれくらいの周期で必要なんだ」

「ん……できれば、毎日。少なくとも、三日に一回は……」

「じゃあ毎日だ。俺が帰宅したら、部屋に來い」

「そんなことまで……」

「他の男から摂取されないとも限らない。それに、ふらふらされると目障りだ」

「……わかった」

それから、精気の補給は私の日課になった。

毎日、夕暮れどき。

クロウが帰宅すると、私は彼の書齋を訪れる。

扉を叩くと「入れ」と短い許可が返り、中に入ると、彼はいつも書類を片付ける途中だ。ペンを置いて、こちらを見る。

「今日はどうだった」

決まってそう訊いてくるのは、搜索の進み具合のことだ。

「……駄目だった。また、手がかりなし」

「そうか」

短いやりとりのあと、クロウは椅子から立ち上がる。

「来い」

呼ばれて近づくと、大きな手が後頭部に添えられて、唇が重なる。

最初の頃は、短い口づけで済んでいた。必要な量だけ精気を流してもらって、すぐに離れる。事務的で、淡白で、義務以外の何ものでもない行為。

——のはずだった。

日を追うごとに、口づけの時間が、少しずつ長くなっていた。唇の角度が深くなって、後頭部に添えられた手に力がこもって、

精気を十分摂取しても、すぐには離してもらえないことが増えた。甘い吐息が漏れるたび、クロウの指が私の髪を梳くように動く。唇の端に残った雫を、親指で拭ってくれることもある。

「ん、ふ……っ♡」

離す前に、ときどき下唇を軽く噛まれる。じいん、と痺れが走って、膝から力が抜けそうになる。そういうとき、クロウは決まって、何か言いたげな目で私をじっと見つめた。

「……どうしたの？」

「……なんでもない」

（そんな目で見ないで。勘違いしそうになる）

義務でしてくれているだけだ。死なれると後味が悪いから。ふらふらされると目障りだから。この人の理由はいつも合理的で、

感情の入り込む隙間がない。優しさめいた仕草も、きつと精気を効率よく渡すための、ただの手順だ。

そう、何度も自分に言い聞かせた。

でも——心が、どんどん溶けていく。

毎日彼の精気を受け取るたびに、身体だけじゃなくて、心まで彼に染められていくみたいで。気づけば、夕暮れが近づく胸が高鳴るようになっていた。搜索の成果が出ない苛立ちよりも、今日もあの書齋で彼に触れられるのだという期待のほうが、先に来ってしまう。

怖い。怖いのに、やめられない。

これはただの補給で、彼にとつては何でもないことなのだと、わかっているのに。私だけが、この時間に勝手な意味を見出して、

勝手に溺れていく。

ねえ、クロウ。あなたは、何を考えているの。

そう訊いてしまえたら、どんなに楽だっただろう。でも訊けなかった。答えが「何も」だったら、この甘い時間に縋っている自分が、惨めになるだけだから。

いいんだな

その夜も、いつもと同じはずだった。

書齋を訪れ、クロウの前に立ち、口づけを交わす。精気が流れ込んでくる。甘くて濃密で、身体の芯に熱が灯る。いつものことだ。

けれどその日、唇が離れた瞬間——全身に、甘い痺れが走った。いつもとは、違う。

身体の奥底から湧き上がるような熱。下腹がきゅうと締まって、視界がぐらりと揺れた。膝から力が抜けて、思わずクロウの胸元にしがみつく。

「おい……どうした」

クロウの声が遠い。

熱い。お腹が、熱い。

服をまくってお腹を見ると、息が止まった。

あの淡い紫の紋様が、はつきりと皮膚に浮かび上がっていた。

森で一度うっすら滲んで、精氣をもらって引っ込んだはずのそれが、今度はまるで違う濃さで、燃えるように疼いている。

適齢期を迎えたばかりの淫魔特有の、本格的な発現。感度が跳ね上がり、理性が溶けていく。

両親がいなくなってから、淫魔の身体について書かれた古い本を、何度も読み返した。だから知識としては知っている。一度こなれば、精氣を十分に摂るまでは消えない。もっと成熟すれば、自分の意思で抑えられるようになるらしい。

けれど、知っていることと、実際に身体がそうなることは、まるで違った。

まずい。よりもよって、こんなときに。今の私には、とても無理だった。

「ロゼッタ？」

名前を呼ばれた。初めてだった。いつも「おい」か「お前」だったのに。

その声が、引き金になった。

「……ごめんなさい」

自分でも信じられないくらい掠れた声が出た。

「ごめんなさい、クロウ。私……止められ、ない……」

しがみつく手に力がこもる。彼のシャツの胸元を掴んで、顔を

押しつけて。これ以上は。これ以上近づいたら、私はきつと。

「……っ」

クロウの手が、私の背中に回された。

拒まれると思った。突き飛ばされると思った。呆れた顔で「自分で処理しろ」と言われると。

でも、そうはならなかった。

抱き上げられた。

軽々と、もう逃がさないとでもいうように、強い力で。

ソファに押し倒されたとき、見上げたクロウの顔に浮かんでいた表情を、私は一生忘れないと思う。

あの無表情が、壊れていた。

怒りのような、苦しみのような、それでいて——ぞっとするほ

ど熱い、名前のわからない感情。

「……いいんだな」

低く、抑えた声で確認された。

頷くしかなかった。淫紋が疼いて理性が溶けていくなかで、唯一はつきりしていたのは——クロウがいい、ということだけだった。

クロウの唇が落ちてくる。首筋に、鎖骨に、肩に。精気とは別の熱が、身体を覆っていく。大きな手が服の上から輪郭をなぞって、ひとつずつ、ほどこしていく。淫紋の淡い紫の光が全身を駆け巡っていく。

頭の中が真っ白になり、考えられない。ただ、熱くて疼いて、早く何かを欲しがる衝動だけが残っていた。

「……あ、あ♡ はやく……クロウ、はやく♡」

自分でも信じられないほど甘く溶けた声が、書斎の静かな空気に響く。

クロウの切れ長の瞳にも、正体不明の熱が揺れている。

「どうしてほしい？」

「あう……あう♡ わかんない……わかんない、よお……♡」

「淫魔なのに、ずいぶんウブだな」

低く嘲るような声に、羞恥が胸を刺す。

それさえも、今は甘い疼きに変わってしまう。

「あ……まだ、なれて、なくて……♡」

「……慣れてない、か。じゃあ、これはどうだ？」

クロウの指が私の胸の頂を、きゅっと摘んだ。

「きゃんっ♡」

鋭い快感が背筋を駆け上がり、腰がびくんと跳ねる。クロウは乳首を指で挟み、ゆっくりと揉みしだきながら、時折爪で軽く弾いた。熱い指先の感触が、敏感な蕾を直接刺激する。痛いほどの強さと、優しい圧迫感が交互に来て、頭がくらくらする。

「あ、ああ♡♡ おっぱい……きもち、いい♡♡」

「ここだけでいいのか？」

「ん……あ……♡♡ そ、れは……♡♡」

「こっちも触ってほしいんだろ？」

もう片方の手が、ショーツの上から秘部に触れた。ぬちゃ……♡という卑猥な音が立った瞬間、背中が弓なりに反った。クロウの指は太くて力強く、布越しでもその圧力がはっきりと伝わって

くる。蜜が溢れてショーツをぐっしより濡らし、指が動くたびに湿った感触が強調される。

「ひあ……っ♡♡　そこ、はあ……っ♡♡」

「慣れてないとか言いながら、こんなに濡れてるじゃないか」

長い指がゆっくりと上下に擦り始める。ぬちぬち♡と、はしたない水音が部屋に響き渡った。クロウはわざと音を立てるように指を動かし、敏感な突起を何度も往復する。布が蜜で滑り、摩擦が甘く強くなる。感覚が鋭敏になりすぎて、布一枚の薄い障壁さえも、刺激を増幅させる。

「あ、あ……恥ずかし、い……♡♡」

「今さら何を恥ずかしがってる。このいやらしいまんこをこれからどうされるか、わかってるだろ？」

クロウの声が耳元で低く響く。息が熱く頬にかかり、男らしい匂いがさらに濃くなる。指の動きが徐々に激しくなり、ぐりつと突起を押しつぶすように圧迫する。ぬちゃぬちゃ♡と音が大きくなり、蜜がショーツを透けさせるほど溢れていく。

「はふ……っ♡ わ、わかんない、ってばあ♡♡」

「とぼけるな……。ほら、こうやって俺にぐちゃぐちゃにされてイクんだよ」

痛いほど張り詰めた敏感な突起をぐりつと押しつぶされる。指が円を描くように動き、時折上下に素早く擦る。ぐりゅぐりゅ♡と、卑猥な音が連続して響く。快感が電流のように全身を駆け巡り、腰が勝手にくねってしまう。

「あひい……っ♡♡ そこ、スリスリされると、へんになる

のお……っ♡♡

「はあ……それも淫魔の手管か？　さすが男を煽るのが上手いようだな」

クロウの指がさらに巧みに動き、ぐりぐりゆと円を描きながら、時折強く押し込む。

ぬっちゅぬっちゅぬっちゅぬっちゅ……♡

指の腹がクリトリスを執拗に刺激する。視界がぼやけ、淫紋が淡く光って全身の感度をさらに高める。クロウの視線が熱く、私の乱れた表情を捉えているのがわかる。息遣いが荒く、抑えきれない欲望が伝わってくる。

「あう、あううう♡♡　しゅご、いい♡♡　そこ、くちくちってされるの、きもちいいよ♡♡」

「淫魔らしくクリちゃんっていえ」

「クリちゃん、きもちいい♡♡ クロウにいっぱい、ぐりぐりされてるのお……っ♡♡」

クロウは言葉が続けながら、時折指先で軽く弾くように刺激し、すぐにまたぐりぐりと押し潰す。快楽が波のように積み重なり、息が上がる。蜜の甘い匂いが微かに漂い、クロウの熱い吐息と混ざって、部屋全体が淫靡な空気に包まれる。

「ほら、イケよ。クリ潰されながらイケ」

グリュリユリユリユッ♡♡♡ぐりいっ♡♡♡

「あ、ふ……っ♡♡♡ ぶっ♡♡♡ なんか、くるのお♡♡♡ きもちいの、きちやう♡♡♡」

びくっ♡びくんっ♡と全身が激しく痙攣した。初めての絶頂に、

頭が真っ白になる。視界がチカチカし、淫紋が強く光って快楽を増幅させる。クロウの指は絶頂の波が引いても動きを止めず、優しく撫でるように刺激を続け、余韻を長引かせる。

「ん、おお、おお♡♡　すご、すごい……♡♡　なに、いまの……♡♡」

過ぎた快楽に、頭がぼーっとする。クロウはわずかに怪訝そうな顔で私を見下ろしていた。

「たったこれだけで、ずいぶん溶けているな……。淫紋とやらのせい、か……？」

まだ胸を激しく上下させていると、再び欲求がじわじわと湧き上がってきた。身体が、何かが足りないかと訴えている。クリトリスが疼き、蜜が太ももを伝う感触がはつきりわかる。

「……あ……まだ、ほしい♡♡♡」

「欲張りめ。ナカもかき回して欲しいんだな？」

クロウは私のショーツを乱暴に引き下ろし、今度は直接、秘裂に指を這わせた。熱い指先が濡れた粘膜に触れた瞬間、びくんと身体が跳ねる。長くて太い指が、ぬうう……♡とゆっくり侵入してくる。内壁が指に吸い付くような感覚。熱くて、硬くて、存在感が強すぎて息が詰まる。

「あ、あつ、あああ~~~~♡♡♡」

ぐりゅぐりゅ……ぐりゅぐりゅ♡♡♡

無遠慮にかき回されるたび、卑猥な水音が響く。指が奥を抉るように動く。天井のあたりを的確に刺激され、快楽が爆発的に広がる。クロウは指を二本に増やし、ゆっくりと出し入れしながら、

親指でクリトリスを同時にぐりぐりと刺激した。ぬちやぬちや
と音が連続し、蜜が溢れてソファを濡らす。

「ああッ！ あっ♡ ぶっ♡ あああ♡♡ しゅごい、きもちく
て、しゅごいい……っ♡♡♡」

「もうトロトロだぞ？ こんなに物欲しそうに締め付けて……こ
れがほしいか？」

カチャリとベルトを外す音がした。太く、長く、脈打つ熱い肉
棒が露わになる。見た瞬間に、本能が疼いた。早く欲しい。早く、
早く。血管が浮き出たその形、熱を帯びた先端から零れる透明な
液。先走りの匂いが微かに漂い、興奮をさらに煽る。

「ほしい、のお♡♡ クロウのおちんぽ、ほしい♡♡♡♡♡」

「……ッ！ どうなっても知らないからな……」

クロウは私の脚を大きく割り開き、熱い先端を濡れた秘口に押し当てた。

「——謝らないぞ」

あやまる……？　なんで……？

ど、ちゅううつつ!!!♡♡♡♡♡

「あああああ♡♡♡♡♡」

一気に最奥まで貫かれた。鋭い痛みが走ったが、淫紋の効果と淫魔の本能がそれをすぐに甘い充足感に塗り替える。クロウの長大な肉棒が、内壁を押し広げ、奥を突き上げる感触。脈打つ熱が、子宮に直接伝わってくる。

ずるる……ばちゅんっ!♡♡ずるる……ばちゅんっ!♡♡♡

「は……さすが、だな。ぴったり吸いついてくる……」

恍惚とした表情を浮かべるクロウを見て、胸の奥が熱くなった。私がクロウを気持ちよくしている。その事実が、たまらなく嬉しかった。

「あっ♡ ああっ♡ クロウ♡♡ うれ、しい……♡♡」

「くっ、いい加減にしろ……！」

唇を奪われ、濃密な精気が流れ込んでくる。甘い味が舌に広がり、頭がさらに溶け、理性の残滓が消えていく。クロウの舌が絡みつき、キスだけで全身が震える。

そのまま激しい律動が始まった。

どちらゅっ、どちらゅっ♡♡と、ナカの気持ちいい場所を何度も的確に突き上げられる。クロウの腰が前後に動き、肉棒が奥深くまで沈み込むたび、子宮が甘く痺れる。

ばちゅっぱちゅっぱちゅっぱちゅっぱちゅっ♡♡♡♡

結合部から激しい水音が響く。蜜が飛び散り、太ももを伝う感触がはつきりわかる。

「んおおっ♡♡♡ むうう♡♡♡ はあ♡♡♡ んうっ♡♡♡」

クロウは深くゆっくり突き上げ、ザラザラした気持ちいい箇所を執拗に擦ったかと思えば、今度は浅く速く動きを変えて責め続ける。角度を変えて斜め上から突かれると、快楽が新しい場所で爆発する。肉棒の太さが内壁を圧迫し、脈打つ熱が直接伝わってくる。クロウの汗の匂いが強くなり、肌と肌が擦れ合う湿った感触が心地よい。

「クロウッ♡♡♡ もっとお♡♡♡ もっとおお♡♡♡」

「……っ！ 男をそんなふうに煽ったらどうなるか、知らないわ

けじゃないよな……！」

クロウの動きがさらに荒くなる。ばちゅばちゅ♡と腰を強く打ちつけ、奥を抉るように突く。肉棒が最奥を叩くたび、子宮が甘く収縮する。淫紋が激しく光り、快感を倍增させていく。クロウの低い呻き声が耳に直接響き、興奮を煽る。

「ほら、中出すから零さず飲めよ、その腹で……！」

「ああ……♡♡　きてえ……♡♡　クロウ、きてえ……♡♡♡♡」

期待と不安が混じり合う。初めて膣内に注がれる濃密な精気……。先走りだけでもこれほど濃いのに、本番で注がれたらどうなってしまうのだろう。それでも身体は正直だった。クロウの腰に脚を絡め、もっと奥へと欲しがる。脚の裏でクロウの筋肉の張りを感じ、肌の熱さを感じる。

「この……人の気も知らずに……」

感情のこもった、低い声。

「もうこれからお前が嫌がっても、容赦しないからな……。俺のザーメンを毎晩ここにたっぷり飲ませてやる……。他のやつのことなんか思い出せなくなるくらい、たっぷりな……！」

ばぢゅんっ!!!♡♡♡♡

「んきやああ♡♡♡♡　いく、イクイクイク……ッ♡♡」

奥の奥まで突き上げられ、頭の中が真っ白になる。クロウの肉棒が激しく抽挿し、結合部が泡立つ蜜でぐちゃぐちゃになる。快樂が波のように何度も訪れ、絶頂が連続する。身体が痙攣し、視界が白く染まる。クロウの汗が私の胸に落ち、熱い滴が肌を滑る感触。息遣いが荒く、耳元で低く名前を呼ぶ声が、快樂をさらに

高める。

ぼちゅんぼちゅんぼちゅんぼちゅんぼちゅん♡♡♡♡♡

「あ、あああああ♡♡ いぎゅ、いぎゅううう♡♡」

びゅるうう♡♡びゅるる♡♡びゅ——♡♡

「——っ!!!♡♡♡♡」

あまりにも濃密な精気が、子宮の奥深くに注がれた。唾液を口で受け取るのとは比べ物にならない量と濃度。熱い奔流が内壁を満たし、全身を精気が駆け巡る。酩酊状態に陥り、身体が震え続ける。快樂の余韻で指先まで痺れ、クロウの脈打つ肉棒がまだ中にいる感覚が、幸福感を増幅させた。

「あ、あああ……♡♡♡ クロウ、すご、かったあ……♡♡♡」

意識が遠のく寸前、優しい口づけが額に落ちてきた。

嬉しくて、胸がきゅうつと締めつけられる。

……深い意味はないと、わかっていても。

事後。

クロウがゆっくりと身体を離れたとき、私の太腿に赤いものがひとすじ伝っているのに気づいた。

「……お前、初めてだったのか」

掠れた、低い声。いつもより少し、震えていた気がする。

「ん……そう……♡」

クロウの表情が、わずかに歪む。

「俺で……良かったのか」

「ん、いいの……クロウなら……♡」

ぼんやりした頭で、本心そのまま零れ落ちてしまった。

次の瞬間、強い力でぎゅうっと抱きしめられる。

広い胸に顔を押しつけられて、クロウの心臓の、速い鼓動が直接伝わってくる。

嬉しくて、涙がにじみそうになった。

……でも、勘違いしちゃダメ。きつと、終わったあとの余韻で、この人も少し気が緩んだだけ。

「お前のルカは……どう思うだろうな」

（え。なんで今、ルカ？）

ぼんやりした頭で考える。肉親が心配する、ということだろうか。案外、律儀な人だ。

「大丈夫……ルカも淫魔だし、わかってるよ……」

同じ淫魔だから、精気のこと、こうするしかないことも、ルカならきつとわかってくれる。そういうつもりだった。

「……そんなものか」

途端に、声が冷たくなった。

抱きしめていた腕の力が、一瞬だけ強くなる。暗い瞳が、私を見下ろした。

最後に、もう一度、ぎゅっと強く抱きしめられた。

それからクロウはゆっくりと身体を離して、ソファから立ち上がった。

「もういいだろう。湯浴みの準備はさせておく」

「あ、でも……」

言葉を遮るように、クロウは書斎を出ていった。

……怒らせちゃった、のかな。

何がいけなかったのか、わからないまま、私はしばらく動けずにいた。



翌朝、目を覚ますと、昨夜のような熱は引いていた。

身体はだるいけれど、精気は十分に満ちている。満ちすぎているくらいだ。

昨夜のことが蘇って、頬が熱くなった。

——自分から、求めてしまった。

淫紋のせいだ。クロウの精気が濃すぎたせいだ。理性が保てな

かったただけだ。そう言い訳するのは簡単だけれど、心のどこかでわかっていた。淫紋が浮かぶ前から、この身体はとづくにクロウを求めていた。

食堂に行くと、クロウはもう席についていた。

「……おはよう」

「ああ」

いつもと同じ返事。昨夜のことなんて、何もなかったみたいな顔。でも私が席につくとき、一瞬だけ視線が合って、すぐに逸らされた。

何を言えいいのか、わからなかった。ごめんなさいも、ありがとも、どちらも違う気がする。結局、使用人が並べた朝食を、黙々と食べた。

そしてその日の夕暮れ、書齋を訪れたとき。

いつものように精気を受け取って、唇が離れたあと——クロウが、私の腰に手を回した。

引き寄せられる。

「クロウ……？」

「……必要なんだろう、お前の身体には」

それは、正しい。精気が不足すると淫紋が暴走する。理屈は通っている。でも。

「定期的にしないと、また同じことになる。違うか」

「……違うない、けど」

「じゃあ、来い」

論理的で、正しい判断。クロウはいつもそうだ。合理的な理由

をつけて、感情の入り込む隙間を消してしまおう。

私も、受け入れた。

ルカを探すために精気が必要で、精気を安定させるにはこうするしかなくて、クロウは合理的にそれを提案していて。何もおかしくない。何も間違っていない。

そして——翌日も。その翌日も。

夕暮れの書斎で口づけを交わしたあと、クロウは毎晩、私を求めた。



身体を重ねるようになって、変化に気づいた。

クロウの精気は、異常なほど濃くて、量も多い。身体は満たされて、淫紋の疼きも収まって、翌朝は精気が満ちあふれて、前の日とは比べものにならないくらい体調がいい。

それなのに――抱かれるたびに、胸がきしむ。

クロウの腕の中は、どうしようもなく幸せで、だからこそ苦しかった。これは義務なのだと、何度言い聞かせても、勝手に意味を見出してしまう自分がいる。

申し訳なくて、嬉しくて、悲しくて。全部が同時に押し寄せて、息ができなくなる夜があった。

そして、クロウの側にも、何かがあった。

行為の最中、彼は時折、奇妙な目をする。

私の顔をじっと見つめて、それから苦しそうに目を閉じる。ま

るで、見たくないものを見ているみたいに。なのに触れる手は、どこまでも丁寧で、どこまでも執拗で。

「……ルカ」

ある夜、事後に。半分眠りかけた私の髪を撫でながら、クロウが低くその名を呟いた。

「ルカという男。大事なのか」

その声には、聞いたことのない色があった。怒りに似ているけれど、もっと複雑で、もっと苦い何か。

「……うん。大事よ」

ルカは弟だ。大事に決まっている。

クロウの指が、一瞬、私の髪の中で止まった。

「……そうか」

再び動きだした指先は、さつきより少しだけ、乱暴だった。

別の夜。

ソファに上半身を預け、腰だけを高く突き出させられた無様な姿のまま、私は背後からの猛攻にただ喘ぐことしかできなかった。ばちゅっぱちゅっぱちゅっ♡ごりゅっ♡ぐりゅぐりゅっ♡

肉と肉がぶつかり合う湿った音が、書斎の壁に反響する。クロウの硬い腰が私の尻を嫌というほど打ち付け、衝撃が腹の奥まで響いて震える。

「おッ♡　おお♡　もう、らめえっ♡　おまんこ、こわれりゅ♡」

限界を訴える声すら、自分のものとは思えないほど甘く割れて

いた。

これでもかと深く抉り込まれるたび、肉の杭が淫らに熟れた壁を押し広げ、最奥の扉を執拗に狙いすましてくる。こじ開けようとするように、硬い先端がごちゅっ、ごちゅっ♡と何度もノックを繰り返した。

「あああッ♡ やらあ、子宮、ぐりぐりされるのやらあ……ッ♡」
内側の脆い入口を連続して叩かれ、ぞくぞくと背骨が溶けるような恐怖と快楽が同時に駆け上がる。

「淫魔なのにこの程度で何言ってる。もっとだろ？」

頭上から降ってくる低い声は、相変わらず冷ややかで、それでいてたつぷりと私を甘やかすような響きを帯びていた。耳元で囁かれる吐息が熱い。言葉と同時に、さらに深く腰が押し付けられ

る。

「あ、あっ♡ おおっ♡ や、だあ……っ♡」

奥の奥、一番敏感な場所を肉塊の頭でぐりぐりとこね回され、視界がチカチカと明滅した。

「やだ？ ここにまた精気をたっぷりぶっかけて欲しいんじゃないのか？」

意地悪く問いかけられ、腰のくびれを掴まれる。子宮を直接擦り上げられる感覚に、抗えない本能が熱く首をもたげる。頭の中が精気への欲求で満たされていく。

「ふうう……♡ せい、き……ほしい……♡」

彼の濃厚な精気を注がれる場所を、自分からきつく締め付けて求めてしまう。体が正直にねだるのに、抗えない。

「そうだろう？　また足りなくなつたとか言わないように、しっかり飲んでけ」

その言葉とともに、再び激しいピストンが始まつた。

ばつんっ、ばつんっ♡と腰がぶつかる音が、乾いた響きを増して部屋に満ちる。逃げようとする腰をがっしりと押さえ込まれ、なすがままに突き上げられる。

「んっ♡　あぁっ♡　それ、やば♡　いぐ、いぐうう♡♡♡♡」

全身が揺さぶられるような刺激に、指先が痙攣し、ソファの背もたれを爪で引っ掻いた。もう限界だ。熱いものが下腹から一気にせり上がってくる。

その瞬間だった。唐突に、荒れ狂う波が引いたように動きが緩やかになった。

「あ、なんでえ……？♡」

行き場を失った快感が体内をさまよい、不安が胸をよぎる。振り返る暇もなく、大きな身体がずっしりと私の上に押し掛かってきた。重く、熱い体温が背中全体を包み込む。

ふいに、まわされた腕が前方に伸びて、濡れた下腹の付け根に指を滑り込ませる。

ぷっくりと熱を帯びて膨らんだ秘めの突起を、厚みのある指が見つけ出した。

「ふあ……!!♡　そこ、はあ……♡」

円を描くように、ゆっくりと撫で回される。皮越しに柔らかい肉粒を転がすような、じれったい愛撫。

背後では、緩やかに腰がちゅっ、ちゅっ♡と波打つように

打ち付けられている。前と後ろ。二箇所を与えられるリズムの違う刺激に、すぐに頭がおかしくなりそうだった。

「答えろ、お前がこれから飲むのは、誰の精気だ」

耳元で囁かれる問いかけに、甘く痺れた息が漏れる。

ぐちゅっぐちゅっと♡粘つく音を響かせながら、指先が肉粒をこりこり、こりこり♡と可愛がるように擦り上げる。

「ほ、おおお……っ♡ ぐんッ♡ りようほう、いじめちゃ……

♡」

前を弄られながら奥を突かれるたび、内側の褰がきゅうきゅうと震えて彼を締め付けてしまう。逃げ場のない快楽に、涙が滲んだ。

「虐められなくてはさっさと言え」

促すように、指がわざと爪を立てて柔く何度も引つかかれ。同時に奥へとぬぷう♡と深く腰が沈められた。

「んあッ♡ 爪、カリカリらめえッ♡♡♡ ああああっっ♡♡♡ クロウ!! クロウのお……♡」

混濁した意識の中で、私はただ彼の名前を呼んだ。彼に支配され、彼に満たされることだけが、今の私の全てだった。

ごちゅっ、ごちゅっ♡くりゅっ、くりゅっ♡

後ろからの抽挿が再び力強さを増し、前の指も敏感な芽を弾き続ける。

「クロウのおお！ おちんぽのお汁の、精気れしゅッ♡♡♡」

自分の口から飛び出した卑猥な言葉に、顔が熱いほどに熱くなる。でも、もう恥ずかしさなんてどうでもよかった。

「ふふ、よく言ったな。じゃあ、イケ」

許しの言葉と同時に、追い打ちが始まった。

内側では肉棒が子宮の奥底を打ちのめし、外側では指先が包皮を無造作に剥き上げて、むき出しになった秘芽を何度も何度もすり潰す。

ぐちゅっぐちゅっぐちゅっ♡ごぶっ♡じゅぷじゅぷじゅぷっ♡

前後から同時に襲い掛かる強烈な刺激に、身体の内側から何かが弾け飛びそうになる。

「ばッ♡ ああああ♡♡♡♡ いぐっ♡ いぐうっ♡♡♡♡」

もう何も考えられない。ただ彼に貫かれ、彼に弄ばれ、彼の色に染め上げられていくだけだ。

びゅるっ♡びゅくっ♡びゅるるっ♡♡♡♡

どろりと濃厚な精気が子宮の最奥に叩きつけられた瞬間、熱が破裂するようにお腹から全身へと広がっていった。頭まで溶かされそうな、強烈な酩酊感。

脈打つ肉棒から注がれる熱い飛沫を最奥で受け止めるたび、下腹の奥から甘い痺れが這い上がってくる。

だらしなく開いた口の端から、唾液がたらりとこぼれ落ちた。思考も理性もとづくに溶けて、ただクロウに与えられる快樂と精気に酔いしれることしかできなかった。

ふいに、目の前に見慣れた大きな手が伸びてきた。親指の腹が、私の唇の端に垂れた雫をゆっくりと拭い取る。クロウがそれを舐めとる気配がした。

息も絶え絶えの私の耳元で、クロウが囁いた。

「……ルカってやつのところ、帰りたいか」

半分朦朧とした意識の中で、私には意味がわからなかった。帰る。どこに。ルカはまだ、見つかっていないのに。

「何……言って……」

「なんでもない」

腕の力が、強まった。痛いくらいに。抱きしめているのか、閉じ込めているのか、わからないほどの力で。

「もう……寝ろ」

その声は、低く、掠れていた気がした。

毎晩、行為が終わるたびに、クロウは私を抱きしめる。その腕の中で、私はいつも同じことを思う。

彼は、何に怒っているんだろう。

怒りだけじゃない。彼の目の奥に時折よぎるのは、もっと切実で、もっと危ういものに見えた。理性で何かを必死に押さえ込んでいるような。解き放ったら取り返しがつかなくなるものを、鎖で繋いでいるような。

聞きたかった。あなたは何を考えているの、と。

でも、聞けなかった。今のこの関係が壊れるのが、何より怖かったから。

うちの女

転機は、突然やってきた。

あの酒場で聞いた「研究所」の噂を手がかりに、証言を一つずつ繋ぎ合わせていくと、ルカが消息を絶った地域が、森の奥のある施設の周辺と重なった。遠くから様子を窺っただけでも、物々しい警戒ぶりが伝わってくる。塀は高く、見張りが絶えず行き来していて、とても正面から近づける場所ではなかった。

それでも、心配で胸が潰れそうだった。本当に、ここにルカがいるのかはわからない。ただの噂かもしれない。見当違いで、何も見つからずに帰ることになるかもしれない。それでも、あの言葉が頭から離れなかった。

研究所。被験体。素材。

もし本当にルカがここにいるのなら——そう考えた瞬間、いてもたってもいられなくなつた。

クロウに相談すれば、彼を巻き込んで危ない橋を渡らせることになる。これ以上、迷惑をかけるわけにはいかない。住むところも、精気も、もう十分すぎるほどもらった。

だから私は、夜を待った。

屋敷が寝静まったのを見計らつて、こっそり抜け出す。月のない晩だった。森を抜けて施設の塀際まで来ると、裏手の茂みに身を潜めて、様子を窺つた。

確かめるだけ。いるかどうかだけ見て、危なそうならすぐに戻る。そう、自分に言い聞かせた。

その時、裏手の見張りが、何かに気を取られたように持ち場を離れた。

今なら、入れるかもしれない。

そう思ったときには、もう身体が動いていた。

身を低くして、私は塀の内側へ滑り込んだ。

意外なほど、あっさり入り込めてしまった。それで気が大きくなったのが、いけなかったのだと思う。

「ルカ……ルカ……？」

息を殺して、暗い廊下を進む。鉄格子の並ぶ一角に出て、その一つを覗き込んだとき――。

「……姉ちゃん？」

聞き慣れた声に、心臓が跳ねた。

「ルカ……！ やっと、見つけた……！」

格子の向こうに、痩せて少しやつれているけれど、確かに弟のルカがいた。涙がこみ上げる。

けれどルカの顔は、再会の喜びとは程遠かった。

「姉ちゃん、なんで来たんだよ。逃げて！ 早く！」

「そんな、何を言って……」

「ほう。やっぱり、いたんですね」

背後から、ねっとりとした声がした。

振り返ると、白衣の男が、満足げに口の端を上げて立っていた。

いつの間にか、廊下の両側を、武装した男たちが塞いでいる。

「もう一人の淫魔が。これは、好都合だ」

「淫魔って……」

「こいつらは、俺たち淫魔を狙ってるんだ……！」

ルカが格子を掴んで叫ぶ。

「不老不死の研究のために、淫魔の精気を搾り取ろうとしてる。逃げろって言ってるだろ、姉ちゃん！」

白衣の男は、心底愉快そうに笑った。

「ルカくん、お行儀が悪いですよ。——ええ、その通りです。永い命を求める方々は、いつの世も尽きませんからね。希少な淫魔の精気は、その鍵になりうる。あなたの弟は、得難い『素材』でした。そこへ、お姉さんまで自ら届きにきてくださるとは。神は、我々に味方しているらしい」

「ふざけ……ないで」

「さあ、こちらへ。寂しくなくなつて、よかつたでしょう？ 姉

弟仲良く、研究に協力していただきますよ」

男たちの手が、伸びてくる。

逃げ場はなかった。背を向けても、塞がれている。心臓が早鐘を打って、足が竦んで動かない。

ここで終わるのかもしれない。ルカを助けるどころか、私まで。その時、頭に浮かんだのは——なぜか、クロウの顔だった。

「——馬鹿か、お前は」

声と同時に、地を揺るがすような衝撃が走った。

ルカを閉じ込めていた鉄格子が砕け散る。魔法の波動が、渦を巻いて廊下を薙ぎ払った。

「なっ……英雄、クロウ……!!? なぜ、ここに……!!」

白衣の男が、初めて顔色を変えた。

剣を提げたクロウが、瓦礫の中に立っていた。刃が、青白く燃えている。

けれど、その瞳は男たちを見ていなかった。

まっすぐに、私だけを見ていた。

「な、なんで……どうして、ここが……」

震える声で、私は問うていた。誰にも告げず、夜陰に紛れて出てきたのに。

クロウは、ほんの一瞬だけ、目を細めた。

「お前は、毎晩俺の匂いを身体じゅうに染みつけて出歩いてるんだ。竜の鼻を舐めるなよ。どこに隠れようが、辿るのは造作もない」

ぞくり、と背筋が震えた。竜の血。鋭すぎる感覚。それが今、

私を見つけ出してくれた。

「なぜ、俺に言わなかった」

低く、抑えた声。怒っている。

「め、迷惑になるかと……」

「それで、このザマか」

「……ごめんなさい」

「……いい。帰るぞ」

「お、お待ちを！」 白衣の男が声を張り上げた。

「勝手をされては困ります！ ここは——」

「文句があるか」

クロウは、振り向きもせずと言った。

「うちの女を、迎えに来た」

うちの、女。その言葉に、場違いにも思わず胸を高鳴らせてしまふ。

男は反対に、ひっと喉を鳴らして黙った。

「で、では、その女は引き渡ししょう……。ですが、そっちの少年はもともと、うちで管理していた被験——」

「管理、か」

クロウの声が、底冷えするほど低くなった。

「無理やり攫ってきて、管理とは。面白い言い分だな。もう一度、言ってみろ」

剣の光が、ぶわりと膨れ上がる。男たちが一斉に後ずさった。白衣の男は、額に脂汗を浮かべて、何度も頷いた。

「わ、わかりました……！ お二人とも、どうぞ、お引き取り

を……」

悔しさを噛み殺すその顔を背に、私たちは施設を出た。

外の空気は、冷たく澄んでいた。

ルカは衰弱していたけれど、私に肩を借りながら、何度も「ありがとう」と繰り返す。

そして、前を歩くクロウの背中に、ぺこりと頭を下げた。

「クロウさん……ありがとうございました。姉を、それに俺まで、助けてくれて」

その瞬間、クロウの肩が、ぴくりと動いた気がした。

夜道を、三人で歩く。しばらくして、クロウがふいに口を開いた。

「ロゼッタ」

「何？」

「ルカは、お前の何だ」

今さら、何を。私は少し笑ってしまった。

「弟よ。……私、言っでなかった？」

クロウの足が、一瞬だけ止まった。

「……そうか。弟か」

低く、噛みしめるような呟きだった。

それから、また歩きだす。月明かりに照らされたその横顔が、ほんのわずかに緩んでいるのを、私は見逃さなかった。

え。今、笑った？

この男がこんなふうに笑うところなんて、見たことがない。光の加減、だろうか。

でも、彼の背中が、さっきより少しだけ軽くなったように見え
たのは、気のせいじゃない気がした。